編集デスク 3

7合目以上の雑誌

長谷川 泉

「看護教育」のスタートは，まことに順調である。医学書院では，これで26冊の雑誌を持つことになるのだが，私自身が創刊に関係した10余冊の雑誌のなかでは「看護教育」は最も歓迎され，発刊のタイミングの合った雑誌であった。

看護教育の領域は，目下いちばん多くの問題をかかえている。戦後外力によって，看護界の刷新がおこなわれたのだが，その余勢は全くなくなって，日本の看護界が主体的に問題の解決に当ってゆかなければならない時に遭遇している。そして，そのためには看護教育の指導者たちが切実に反省し，勉強をしなければならない。その気運は，まさに醸成されている。

だが，現実は，そのような切実な要請にこたえるよい書物や雑誌がない。医書の出版については7合目以上の企画ということばがある。富士山にたとえれば，ほんとうに本を読む医学の研究者は，7合目以上に相当するのである。それは，裾野にくらべればずっと数はすくない。だが，本を読み，研究し，研究を推進する者は7合目以上の数すくない人たちなのである。だから，7合目以上を対象にした企画は，何万と出るものではない。いや医師の総数が10万弱なのだから，7合目以上はせいぜい数千，いや，テーマによっては数百ということになる。だが，そのようにすくない数を対象にしても医学の出版では7合目以上を目標にしたすぐれた研究書が出版される。昨年出された東大所安夫博士の「脳腫瘍」(1万8千円）という本などは7合目どころか9合目の企画である。

ナースの世界においては，残念ながら，今までは7合目以上の企画は出なかった。富士の裾野とは言わぬにしても，だいたい3合目か4合目ぐらいまでを対象にした本や雑誌が多かったのである。看護教育に当たる指導者は，そんな低いところにはいない。たいていは7合目以上に位置しているであろう。看護界を対象にしても，7合目以上の企画を出そう――これは，医学書院の編集室に起こった強い声であった。「看護教育」は，この線から企画され，発刊されたものである。

7合目以上だから，部数ははじめから多くないことは承知の上である。しかし，この「看護教育」の1冊は，裾野の雑誌10冊にも匹敵するような意味を持つ。私はそう確信している。7合目以上の企画は，読者数もすくなく，定価も割高になり，しかも悪くすると，お台所は火の車になるおそれもある。しかし，これは意義のある仕事である。そう言って私は編集部を督励している。

この雑誌に無駄なところは1行も作ってはならない。私は編集部にそう厳命している。表紙も記事にあてる。石原明先生に依頼して，看護史のグラフを連載したのも，その意味からである。7合目以上の雑誌にあっては表紙もまた遊びであってはならない。そして，いわんや本文においておや。今や「看護教育」の編集室は，本文に1行でも余白を残してはいけないという編集長の厳命を厳守しているのである。

（筆者・医学書院編集部長）

ます。また月に一度は臨床研究会というのを持ちまして，婦長さん，それから臨床指導補佐，そういう方たちが寄りまして，学校の学生指導の面について検討していくという，研究会を持って進めていっております。

＜看学連をどう考えるか＞

編集部 先生は，看学連参加問題など，どうお考えですか。

伊藤 私，今のところ，若い人は，行き方が変わってきておりますので，ただ食わずぎらいではいけないとも思うのですが，その真相をもっと知ってからでなければ，あのいろいろ発表されてるものだけでは，ちょっと私，全面的に信じられないような……。ほんとにあの気持でいなればと思うのですけどね。いろんな方面を通して私自身も研究していますが，まだ，勧めて，入りなさいというところまで私の気持がならない。なれないんです。

編集部 安保反対のときはどうなさいました？

伊藤 案外ね，無関心なんでございますよ。私のところはそれだけ忙し過ぎるのかしらと思って，「あんたたち，樺さんがなくなったのを，なんとか思わないの」といいましても，案外無関心だったんで，ほんとは私これじゃいけないと思ってね。もっと社会に目を向けさせなきゃいけないと思うのですが，これは学生だけじゃなくって，看護婦さんたちにも社会に対する関心は薄いのじゃないでしょうか。案外，私が思っているほど感じないで，無関心でございました。

編集部 ちよっと，さびしいですね。

伊藤 さみしいくらい関心がなかったのですが，私ところの学生さん，忙し過ぎる。レポート書きや，何かと追われておりまして，ひまがなかったらしい(笑)。とにかく，うちの学生，ちよっと忙し過ぎるようです。

玉田 私のところは，比較的，いろんな社会的な会合とか，そういうものにも学生は出してもらっています。社会見学という意味で，視野を広くするという意味で，割合に雪永先生がそういう点理解をしておられて，出してもらっているようでございます。

© IGAKU-SHOIN Ltd, 2013

2026/09/21 01:22:21